



ニキ・ド・サン・フェール 白身の手によるニキ美術館の建築プラン(原案)



展示室3.4の作品群



射撃絵画をはじめとしたニキの初期作品群がある展示室1

あったボンタス・フルテン氏から、「ベル・オロフ・ウルトヴニットと組んで三人で展覧会をしないか」と誘われた。それで、勇んでストックホルムに行つたんですが、期日が迫っても何のアイデアも湧いてこない。困つて、「これじゃどうしようもないから三人で逃げよう」と相談しているところへフルテン氏が、「ニキは昨年「ナオ」を創つたではないか。その「ナオ」を橋にしてみればどうだろうか」と言われた。「そうだ、いける」と言うので、みんなワインやパンやチキンを買つてきて大いに盛り上がった。巨大な「ナオ」の中を水平の共通のテーマである「ヘタイナミック・ラビリンス」(迷宮)にしようということになって、どんどんアイデアが浮かんでいった。作品はニキを橋にしてティンゲリーがデッサンしたものをとくに二人で仕上げたという記録があります。

「ナオ」にしてもそうですが、ニキの作品はティンゲリーの影響を多く受けている。

増田 その通りかも知れませんが、影響というより相互に刺激し合い続けたと言つた方がよいと思えます。ニキは「六〇年代の射撃絵画と今の「ナオ」やその後の作品はコインの裏と表だ」と言っています。ニキの作品に会つた時、私は「ニキは私だ」と思いました。五十歳になつてある程度にはみ出ないよう親として妻として何とか世間並みにはみ出ないよう生きてきた私ですが、ニキの作品は私を子どもの時の裸の女の子、好奇心の強い失敗を恐れない女の子に戻したのです。そして、人間として、女として新たに生きる勇氣や夢、誇りなどを与えてくれました。

那須の自然とニキの作品

——美術館を入つたところに、ニキさんが造つた美術館の模型(作色)がありますね。もしそれが実現していたら、「タロット・ガーデン」(イタリヤ・トスカナ地方のガラッピネオに一九七八年から建設されたニキの理想宮殿。現在も建設中)と同じように、緑の木々の間にニキさんの鮮やかでユニークな色の建築物が見える、とてもきれいで楽しい美術館になつたかも知れませんね。

増田 ニキは色彩の魔術師って言われた方です。私は「タロット・ガーデン」を何度も訪問していますが、一九八三年にそこにいるニキを訪ねた時、「女帝」という巨大な立体の作品の右の輪の中に寢室を作つて、その下のアトリエでタロット・ガーデン全体の造営の現場指揮を執っていました。外側はまだ白いコンクリートで、足場も組まれたま

までした。その育中にあるベランダと呼ばれて、そこに腰かけながら、あそこはこんな色にしてこうするのだ、というんな説明をニキから受けましたが、隅から隅までイメージしているんだと言つてに吃驚しましたね。その二年前、初めて招待されてパリのアトリエを訪ねた時には模型しか見なかったんですが、それは粘土で造られていて、小さな直径四〇センチくらいの丸

い土台に、よきよきと何とも不思議な角のようであつたり、怪物のようであつたりする物達が生えたような模型で、「これはタロットカードの巨大なルカナをモチーフにしたもので、一十二個の巨大なモニュメントになる」とニキが説明してくれるのだけれどピンとこなくて。何という途方もないことを考えている人だろうと、呆然としました。

——美術家はアトリエとかで作品をつくつて、画廊や美術館で展示しますね。展示するところはどうしても限られてしまう。ところが、今の美術家の中にはそう言つた限られた空間から脱して、野外に展示したり自ら建築空間そのものまでをつくつてしまふ作家が現れてきている。ニキさんにしてはどうだと思ふ。

増田 ええ、その通りですね。それで、タロット・ガーデンでもボンビドーでもニキの作品の多くが野外に展示されているのに、ニキ美術館ではなぜ外に展示しないんだと言われる。でも、那須のような寒冷地というのは、まずモザイクのような作品は耐性の面でポロポロと剥離が起きるから野外展示できないという辛さがある。「大きな蛇の樹」の噴水も外に展示できなくて残念なんです。それなら、一歩室内感覚で、密度の濃い展示、展示空間の中でお客さんに不思議の国に入ったアリスのような体験をしてもらおうじゃないかというので、現在のような方法にしたのです。外に置くと伸びがはするけれど、お客様の意識は拡散してしまふというこ



「手」(1983年)

ころもある。しかし、野外展示は私にとって大切なテーマではありません。

この美術館については、「スプリッチュアルな体験をした」、「勇氣を得た」、「ニキって人は知らず偶然に見ただけけれど、こんな芸術があるというのには驚きである」とか、アンケートももう六千枚近くもたまつていますが、五歳のお子さまもたどどしい字で面白かつたという、七十歳の方も同様に楽しんでおられる。五歳から七十歳までのアンケートがある美術館は他にないんじゃないでしょうか。或る、ニキのことを何も知らずに来た五十六歳の女性のアンケートには、「作品を見ながら、自分の過去がフラッシュバックのように思い出されて、涙が出てきて止まらなかつた。自分が本音で生きてきたのが間違いでなかつた。これからも本音で生きていく確信が持てました。ありがたう」と書いてあつたんです。それを見た時は、ああ、ニキ美術館を造つてよかつた、と本当に嬉しく思いました。

——楓やツツジや沙羅双樹や山椒子などを植えた庭も素敵ですね。特に、植え込みの長い小道を歩いていくとダイヤモンドカットの屋根が現れ、ガラス越しにニキさんの華やかな色彩の作品が目に飛び込んでくる突然の出会いのような景観。さらに、内部に濃密に、進んでいくとにざわめきのようになり立ち上がつてくる作品の集合体。本当に、不思議の国に迷い込んだアリスのような体験をさせていたいただきました。今日は本当にありがとうございました。